

エ ッ セ ー



1960年頃だったと思うが、山岳部創立以来の山行記録をまとめて部報を作ることになり、記録を整備し、西前氏・田村氏・橋本氏等は紀行文・評論を書いた。そしてその編集・刊行の任を私が引受けたのであったが、力量及ばず、原稿を預りながら、坐折してしまった。誠に申し訳ない次第である。

それから10年余り、現役諸氏の部報発刊の熱心なとりくみに動かされて、押し入れの隅から当時集まった原稿を取り出し、再読してみた。私のひとりよがりかもしれないが、10余年の経過にもかかわらず、どの文章も、新鮮な息吹を伝えてくれる。大阪外大山岳部の歴史を構築するのに、欠くべからざるものであると考えたので、収録することを編集子にお願いした。

1972年8月

〔奥田記〕

自 分 の 山

西 前 四 郎

我々の山岳部が如何に在るべきかという課題を前に、私は“何故登るのか”という執拗な問いを跳び越すことが出来ない。しかし、多くの山の先達が幾度もとりあげては、もどかしげに語ってきたこの問いに、何をつけ加えることが出来るだろうか。たゞ、「山がそこにあるから」ではなく、何かを求める心が私を山へ駆りやるのだとは言い得る。何かとは、深い樹林をめぐり歩くromanticな「憧れ」と「安らぎ」や、高原にcamp-fireを囲む親しみ深い「友愛」を、また夏の明るい岩壁で一握一握を自分の手足でちかちかとしてゆく、燃えあがる「歓喜」と「生命の充足感」や、心軽く雪渓を滑り下る「爽快さ」を、そしてまた40kgを越える重荷を背負って、呻きながら、一步一步祈るように山径を進む、あの厳しい「自己克服の試み」や、-20℃にも下る寒い冬の朝、誰よりも早く起き出て炊事にとりかゝる「自己犠牲の精神」を、また、堅く凍った氷壁にピッケルを振りながら攀じてゆく、その僅かなゆるみも許されない激しい「緊張感」や、この登攀をいつかはヒマラヤへ継ごとと念ずる「末踏への情熱」を挙げれば足るだろうか。それとも、これら全部をひっくるめて「常にFreshで充実した生命」と言い直せば良いのだろうか。

「山々は喜びも苦しみも共に包みこんだまゝ僕等を惹きつける。——人生のように。」

しかし我々が求めるものは人それぞれであるだろう。であればこそ、我々の山岳部には何も明確なtypeらしきものはなかった。クラブ結成以来、dogmaticなものはいっさい排拆するように務めてきたのだが、只、我々には登山のうちのスポーツ的なもの・積極的な性質のものを行うという公約数は、置かれてあり、そこから、部活動の何らかの方向づけは生れてくるだろう。部を一つの定型にはめこむことは、考え方も能力も違う個人に対する強制をしか意味しないが、

登山に対して精神・技術の両面で、常に前向きであることが暗黙のうちに部員の前提条件とされ、日曜毎にトレーニングをもつことで試されてきた。と同時に、各人の個性は尊重されなければならないが、実際には合宿中心の部活動のために、無視されることさえあった。しかしこれも、その要因は漫然と合宿について行くようなその主体性のなさ・無自覚の為であり、むしろこれこそ、最もアルピニズムの精神から遠いところにある恥ずべきものではなからうか。登山とは純粹に個人的なもの、個人の自発的・独立独歩の行為であり、我々が、グループを成す理由は、観光案内所のような便宜機関としてではなく、あらゆる意味で「より大きく育つため」でしかない。一人一人がしっかりと主体性を確立し、「自分の求める山」へ向うべきである。そして、部はこれらすべてを包含する広やかなものでなければならず、部の方針とは、それらの総和に他ならない。

〔H - 36年卒〕

初 め て の 山

奥 田 邦 治

曲りくねった凹凸のはげしい山道を喘ぎ喘ぎ登るバスはぎっしり詰め込まれた登山者と大きなザックに挟まれた僕達を情容赦なく揺すぶった。不快な気分は目前に追った初めての登山への期待と不安、未知に対する時常に覚えるあの感情によって片隅に押しやられていた。バスを降り立ち出発準備をしている間に子供の様にはしゃぎ廻っている自分に気付いた。車中から眺めた南アの連山はただ巨大な物体としてしか心に映らなかった。けれども今その懐を流れる河原に立ち、灼熱の陽に焼かれながら肩に喰い入る荷を担いだ時、今日の行程を頑張り抜いてやろうという闘志が湧き、これまでにない緊張を覚え心が躍るのを禁じ得なかった。

ものの十分と歩くうちに重荷は肩を圧迫し、手は感覚を失い、腰は耐え切れないかの様にぎしぎしと悲鳴をあげる。身体は熔鉱炉と化し、額から流れ落ちる汗は眼を伝い口に入り、栓の閉まらない水道を思わせる。目はくらみ、足はふるえ、息が切れる。自然は苦痛を救う一吹き風の風さえ与えてくれない。頭上から照りつける陽と地面から立ち上る熱気とそして鼓膜にドリルを当てる様な蟬の声だけがあった。この苛酷な自然の仕打ちに肉体は全てを投げ捨てたい衝動に襲われる。それにも拘らずよるめく足は一步一步その衝動に反抗し続けるのだ。

この衝動と反抗との激しい争いの中に僕はそれ迄観念では把握し得なかった自己の存在を実感として感知することが出来た。これは実に確っかりした虚偽のない認識だった。そしてこの新しい認識はそれ以後、僕の生活の諸条件を次々と改変していったのだ。

入山第六日目だったか、北岳から農鳥岳へ僕達は向っていた。午前の行程は実に長く疲労は相当ひどくなっていて、その上濃いガスにすっぽり包まれてしまった。予測し得ぬ事態の発生を意識して僕は不気味な気持ちに捕われていた。予想に違わずやがて横なぐりに豪雨が襲いかかってきた。骨にしみ通る寒さ、夏の雨がこんなに冷たいとは……。

全身ずぶぬれになって一刻も早く目的地に着こうと必死になって走った。鼻水がとめどなく流れ出る。冷えきった足はけいれんを起して思う様に動かない。けつまずき、転び、起き上り、気

ばかりあせる。疲労困憊の果て目的地に着いた。しかしそこには衣服を乾かす火もなければ空腹を満たす一碗の粥さえなかった。湿った木はなかなか燃えつかない。やっと暖かい食物にありつけた時、周囲は夜の闇に包まれていた。遠くには街の灯がかすんでいた。しかしそこには何ら僕を惹きつけるものはなかった。岩角に腰を下ろして紫煙をくゆらしながら入山初日に発見したものをあらためて確認し得たことで心は満たされていた。そして想いは未だ知らぬ冬山へと飛んでいた。……冬山はもっときびしい状況を提供してくれるだろう……。〔IN-37年卒〕

夏 山 — 1958 年 —

西 前 四 郎

6月末、白馬山麓の神城へ出向いた。授業には何の未練もなかった。梅雨どきの田圃の手伝いなどしているうちに、奥田もやってきて、ポッカのアルバイトが始まった。部落から五竜小屋まで起伏の激しい遠見尾根を、寝具や食料を担いで登った。スキー場のヒュッテを借り、炊事夫には寺田さん(田)が卒論の資料などかゝえて来て呉れた。往復12時間はかゝるアルバイト(苦役)だったので、雨が降っては休み、寝すごしては休みして、ちっとも儲からなかった。遠見尾根の雪田や雪渓は一日一日目に見えて減っていき、融けたあとには雪割草や岩かがみが可憐な花を咲かせた。

白岳の斜面には山あざみが沢山生えていて、それを味噌汁に入れたり、あえものにしたりして食べると、野性の人間になったような気がした。休みの日は窓ぎわの机に頬杖をついて、ボンヤリ外を眺めて過した。スキー場は茅場で、硬い紫色の鬼あざみの花が一杯咲いていた。7月一杯で寺田さんと奥田は大阪へ帰った。僕は8月1日から一週間、五竜小屋に寝泊りして、キレット小屋迄、材木を運んだ。山は最盛期で、山小屋は満員電車なみの詰込みようだった。最もひどい晩には、お客は膝をかかえて座るだけのスペースしか与えられず、小屋番やカンの良い客だけが増築用の材木を工夫してノビノビと眠った。槍ヶ岳から縦走してきた寝屋川のT氏親子と道連れになって、秋からT君の家庭教師をつとめることになったりした。

神城の部落でノズビリ躰を休めた後12日上高地へ向い、関西登高会の岳沢合宿に参加したが、毎日毎日雨が降り続き、皆ふて腐って下山した。残留メンバーだけで、辛うじて前穂高東壁とコブ尾根にありついた。その時のパートナー・T君も翌春北尾根IV峯新村ルートで吹雪に捕えられ、今はない。21日奥田が岳沢へ上ってきた。22日トリコニーより奥穂を越えてジャンダルムT1フェースを登攀。ジャンダルムは僕にはまだ手強かったがスツキリした岩壁をトップで攀じた喜びは大きかった。ジャンダルムの肩でビヴァーク、夜明けからの雨の中を天狗コルを経てテントへ帰った。24日下山、伊那大島へ向い、高橋以下賑やかな面々と落合う。(南アルプス縦走合宿)

8月31日(雨)三伏峠での3日目。誕生日。「Chaosの内に一年」「今年もまたそうだろう。僕は烈しく生きること、僕のやり方で自分の人生を愛することしか望まない。秩序とい

調和といふ、燃えあがる生命の焰を閉込めようとするものに他ならない。何故それらを懐しいものように求めるのだ。」「廻れ廻れ、孤独なジャイロごま！」

9月6日下山。11日（秋晴れ）大阪着。

[H-36年卒]

新 雪 の 鹿 島 槍 で

1958年11月

橋 本 博 之

十一月四日、僕は激しかったきのうの登攀を思い浮かべ、いまだ興奮さめやらぬ心で、新雪に輝く鹿島槍をなんどもなんどもふり返りながら、ただ一人落葉松の落葉吹雪を受けて、黒沢峠への道を急いでいた。

大阪を出る時から天気はよくなかった。築場の駅で混雑した汽車からはき出されると、僕達二人を迎えたのは、つめたい霧雨と樹々の紅葉を映して静かに登んだ中綱湖であった。早々に朝食をすませて、ガスの中をまだ見ぬ山に向かって出発した。入山の時のあのいい表せぬ期待と緊張が僕を包んだ。テントとザイルでふくらんだザックはズッシリと肩にくい込み、この新米の夜行疲れの身体を痛めつけた。

黒沢峠から大谷原を経て大冷沢に入り西俣出合に着いたのは二時に近かった。鹿島槍はこの入山の途中にきわめて情緒のある景色が展開する。この山はそういった意味でも僕の好きな山の一つである。

翌日もまた雨。しかし午後にはようやくやんで偵察にでることができた。夜になってテントから首を出すと、空に星がまたいた。明日はいよいよ登れると思うと不思議と涙がでてきた。

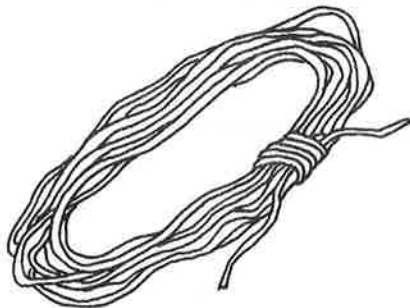
十一月三日六時、Nさんと僕はダイレクト尾根めざしてテントをあとにした。「知らぬが仏」の言葉通り、僕は前途にどんな困難が待ちうけているのか知りもしなかったから、ガラガラの石に足をとられ、堅いスノーブリッジの上では時々すべってひやひやしながらついていった。適当な所で尾根に取付いた。こうなると僕は地形など全く解らないから、ただついて行くだけであった。急な草付の斜面で苦労したり、木登りをしたりする頃には新雪が現れて来た。尾根が平担になった所で昼めし。天気は上々なのでありがたい。しかしさすがに寒い、のんびりとカンパンをかじるわけにはいかなかった。それからはいよいよ岩登りであった。岩と雪と樹木のミックスした尾根をザイルでしっかりと結び合せて突破するのだ。

ところがやがて自分達の登っている尾根はダイレクト尾根でないことがわかった。というのはダイレクトに鹿島槍南槍につき上げる尾根がすぐ北側に小さな沢をへだてて見えたからである。もちろんそのまま登るよりでだてはなかった。よくみるとダイレクト尾根の方にも登山者がいてほとんどコンテニユアスで登っている。こちらははやくからスタックカットで足どりは遅々として進まない。やがて樹木は少くなり、傾斜もぐんと急な、雪をかむった岩稜となった。陽が傾くにつれて疲れが増し、僕はしだいに思うように力がでなくなった。せきたてられて一ピッチ登る

だけでも息が続かなくなり、手を使いすぎたために手はほとんど上にも上らなくなった。何度見上げて稜線がそう近づいた様にも思われない。全身の疲労がその極に達した午後四時すぎ、最高の悪場に直面した。折から小雪がちらついて来た。僕はただジッヘルするために立っていることすら苦痛であった。秋の日はつるべ落しに稜線のかなたに消え、凍るような冷たさが僕の足と手を襲った。なんとかNさんがうまく突破してくれないかと願いながらも、もはやジッヘルすることに精神を統一することができず、つらいということだけが頭を駆けめぐるのであった。きっとその時にはいまでも泣き出しそうな顔をしていたことだろう。尾根の正面は絶壁となっているのでやや左へまきぎみに登ろうとしているのだが、これも相当悪いらしい。ハーケンはほとんど使いはたしていた。トップの姿はみえないがザイルの動きぐあい、どれほどNさんが苦勞しているかが想像できた。アイゼンの不気味に岩にきしむ音がきこえた。夕暮れは空をコバルト色に染め、その色は刻一刻と濃さを増していった。なぜかその景色がむしろ美しいものに思われた。

待ちどおしいジッヘルが一時間近くも続いたあと、ようやく「いいぞ！」という明るい声がきこえた。僕はただがむしやりに登った。悪い所だがなんともなかった。ただはやく登りつきたかった。身体は疲れていたが、精神はまいていなかった。フアイトだけが僕の身体を動かしていた。もう一ピッチ登ると傾斜はとたんにゆるくなった。僕は雪に足をとられながら夢中で急いだ。そしてもう登るべき所がなくなった時、眼前に現れたのは暮れ行く地平線に青白く浮かぶ剣の稜線であった。うれしかった。成功したりれしさよりも、あの苦しきから解放されたりれしさであった。そして冷池へもうとっぷりと暮れた山道を走るように下った。そのうちに不思議とだんだん満足したような気持ちになって来た。そして心が浮きたち、今までの苦勞を忘れてなんだか楽しくなってくるのを感じた。ふもとに町の灯のきらめくのが美しかった。

〔日 - 36年卒〕



初 雪

田 村 俊 介

学校から帰って夕刊に目を通してると、三面の下の方に小さく書かれていた、“北アに初雪”という見出しが目に入った。北アルプスに初雪が降りた。心待ちにしていた初雪が北国の山々にもついにやって来た、という半面、もう紅葉で色どられた閑静な秋山も過ぎ去り、今年はどうとう秋山に入ることなしに終わってしまったという、何か心残りの寂しい思いが胸の奥に来往した。その記事を読み終えた時、それはいよいよ現実感となって、後には力が抜けた様な空虚さだけが胸の中に揺った。

※

※

僕はバレー・ボール部に所属していた為、例年秋に行われる東京外大との定期戦が近くに追っ来ていたので、今年は秋山には到底入れようはずもないのに、それでいてこれまで可能性のない期待が身体の何処かに蹲り、僕をいらいらさせた。ところがそんなむなししい期待を実現出来る機会が二度も僕に訪れたのだ！

秋の初めに、四日程続いて行われる学内試験にどういふ風の吹き回しか幸にも僕の受けていた学科はその難を免れていた為、日曜と噛み合せ、五日間程INのOと前穂高東西A・B・Cフェースと、前穂高北尾根四峯奥又白側正面フェースを急いで計画した。Oとは三年間も一諸に山に行っていないながらどういふ訳か、まだ一度もザイルを結んだことがなかった。

前穂高東面フェースは洛陽の紙面を高めた井上靖の「氷壁」の舞台にもなった所で、夏はハイカー達で賑わう赤い屋根の徳沢園からも、梓川の藍を隔て、容易に見渡せる岩壁である。夏の夕方など落日の光を背に受けて、黒々と居座ったその岩壁は、北欧の古城の憂鬱と、日本の城のあの威厳とを兼ね備え、クライマーばかりでなく、初めて山を見る人達にも胸を絞めつける雰囲気、虚空に揺がせていた。取り分け晩秋、紅に染った木々の間から垣間見られる、その黒々とした佇まいは、そのほとりに流れる梓川の誘のせゝらぎが無くても、僕達を虜にするのに十分であった。

ところがいよいよ出発だという前夜、ラジオが台風十六号接近の報を伝えたのだ。僕はその日、Oの家で一諸に食料を購入したり、登攀具を点検したりしていたが、これはどう見ても断念せざるを得ない様な大きな、しかも日本を目がけて、あまりにも真すぐに北上してくる台風だった。台風十六号は僕達の予想通り、真正面からやって来て、名古屋を荒すだけ荒した後に、伊勢湾台風という俗名と、甚大な被害とを置き土産に、遠く北の海へ去って行った。翌々朝、キーンと金属性の音をたて、澄み渡った秋空を、僕はただ恨めし気に眺める以外に手が無かった。その日学校へ行く途中の天王寺駅にデカデカと貼られた“秋の上高地”のポスターは嫌でも僕の目についた。

次の山行の機会は全く予期せぬところからやって来た。伊勢湾台風来襲の二週間程後のある日、山岳部の連中は穂高に出払って、後に残された僕は学校から早く帰り、下宿で晩めしを食べていた。その時突然、「ソウナンカモシレヌヤマノヨオイソオオサカエキヘコイ」と打たれた電報を受け取った。初めのソウナンという活字を見たとき全身の血が一度に逆流した様だった。僕には初めての事件であるだけに、慌てしまった。シラフとアイゼンをザックの中に投げこみ、さてピッケルだ、ところがどこを探してもピッケルがない、どうしたんだ、何をしているんだ、同じ所を二度も三度も探してみたところで見つかる筈がない。やっと穂高に行った連中に借したことを思い出して、下宿を飛び出した。

大阪駅に着いた時は丁度ラッシュ・アワーで、ものすごい人の渦だ。あちらに押され、こちらにこずかれて、人と人との間をうろうろするが、山岳部の連中の姿は見つからない。無数の人の排気の中で、大きなザックを背重って右往左往するので汗が額からしたたり落ちてくる。同じ所を二度も三度も行き来するが見つからない。ようやく意を決して一番近いNさんの下宿に行くことにした。Nさんの下宿に行くと、一諸に行った友人のKさんが一人先に帰っているのがわかった。そこでKさんと連絡を取ったところ、連中は昨日東壁に行っているとのことで、遭難があったとすれば東壁しか考えられないという。それに向うは人手が少なく、「ソウナンカモシレヌ」というのならやはり最悪の事態を考えるべきだ、とにかく今なら二十三時三十分の最終列車に間に合うから、とりあえず君は先に立ってはどうかということなので、今日出ておけば明日の夕方には横尾のベース・キャンプに着けるから何とか向うの様子がわかるだろうと思い、後の連絡はKさんをお願いして、最終列車に乗りこんだ。

汽車に乗るまでは、何が何だかわからず、徒にせかせかしていたのに、汽車が動き出すと急に気分が落ち着いて了って、ぼんやりと窓から外の暗い夜景に眺めていたが、ただ外の景色が暗い夜気の中で急速に動いていることだけが妙に気になった。何か考えようと思っても考える対象が一向に思い浮んで来ない。どの位たっただろう。どこかの駅で駅弁売りの声を聞いて、急にものすごい空腹感に襲われ、晩めしを食い差しにして下宿を飛び出して来たことに気が附いた。底にくっついた様な駅弁だったが、それでも幾らかは空腹感を充してくれた。しかし苛立っているせいか、一時が過ぎ二時になっても寝つかれはしなかった。それで半端寝ることも諦めて、タバコに火をつけたが、風邪気味の喉にはにがいで、ちっとも美味くなかった。タバコは少しのんだだけで、あっさりと窓の外に棄て、僕はようやく穂高に入っている連中の事を考え始めた。だが、遭難しているかも知れない彼等の顔はいつも笑顔を浮べてしか僕の脳裡には現れてこなかった。実際、三日前まで学校の食堂で、彼等と馬鹿話に花を咲かせていた僕にとって、彼等のみじめな顔を思い浮べるなんてことは、どだい無理な話だ。闇の中をつっ走る汽車の中で全く自分を持って余して了った。それでもその内に、うとうとし始めていたが、やがて汽車がガタンと止るショックと同時に、「大阪外大のTさん、大阪外大のTさん」というマイクの呼び声にふと気が付き我に返った。僕は汽車の窓を開けて、夜気に冷えきった空気の中に顔をつき出した。駅は米原だった。人の気のない構内でマイクに向って立っている駅員を認めて、手を上げて合図した。

「ミンナブジアンシンシテカエレ」駅員の持って来てくれた電報を見て、安心感と同時にこれまで張りつめていた気持ちがすーと溶けて行く様だった。しかし心の底では、慌てゝ電報を打った奴に少々腹を立ててもみた。汽車が発車の警笛を鳴らした時、自分が汽車を下りねばならないことに驚いた。僕はザックを持って急いで乗降口まで来て、客車の中を振り返って見た。乗客の大部分は静かに目を閉じて寝ていたが、処々にタバコの紫煙がゆらゆらと立ち昇っていた。僕はこのまゝ列車を降りて了うことに躊躇した。山に行く途中、何がどうであれ、汽車を降りて、又大阪に引き返すなんてことは不合理極らないことだ。この汽車の中で目を閉じて、夜明けを待ちさえすれば、もう松本に着いてしまう。そして自然の成行きで、河童橋の袂に立ち、僕を窒息させる様な穂高の山並みを、手の内に眺めることが出来るのだ。山はより高く聳え立ち、雲はつっ走って僕を向えてくれるだろう……。だがそんなセンチな連想を立ち切れ、と云わんばかりに、汽車は大きくゴトリと動いた。僕はこれはいけないとプラット・ホームに飛び降りた。汽車は見る見る内に、テール・ランプの赤だけを闇に残して消えて行った。「食料の持ち合せもあまりないし、ふところだって十分でないのに行っても仕方が無いよ。上高地まで行っても、まだ指を癒えて返って来るだけさ。」と自分で自分に云い聞かせながら、陸橋をきしませて下りのプラット・ホームに向った。下りの一番列車は運良くすぐやって来て、僕を文句なしに大阪まで連れて帰って来た。

再び大阪に帰って来た時、大都会のビル達は朝霧の立罩めた中に肩を怒らせて、屋の汚物をひっくり返した様な、喧騒と渾沌等しいも寄らない程、白く淡く清潔に立ち並んでいた。そして大阪駅の前の猫の額程の駐車場までが、その時の僕には広々とした休息場の様に思えた。僕はその休息所に出て牛乳を飲んだ。牛乳は寝不足で、ぼんやり霞んだ五体に溶け込む様に流れこんでいった。牛乳売りの朝鮮人のおっさんが、背重っている大きなザックに目をやって丁寧な口調で、「山に行かれましたか。どうも御苦労さんです。」と云ってくれた。僕は「ハア」と曖昧に返事して、その場を立ち去った。下宿に帰る道々、又秋山に入る機会が、羽が生えて何処かに飛んで行ってしまったことに苦笑しながら、『でも今度は、例外的なことなんだから、山に行く機会等と云っていたら、穂高の連中が気を悪くするだろうな。』と思ったりした。

※

※

この突発事件が有ってから二日後の夕刊を手にして、北アルプス一帯に初雪が降ったことを知ったのだ。

“北アに初雪〔松本〕十三日夜六時頃、北アルプス一帯に初雪が降り始め、穂高連峯涸沢谷で、同日午後七時現在気温一度、積雪は約30cmになり、なお降り続けている。”という。

僕は二度目を続き終えて、新聞を机の上に置いた。目を閉じると、黒い岩肌に初雪を纏った穂高の岩稜が冷たく浮び上り、やがて燦然と消えて行った。

〔 編 集 子 へ の 手 紙 〕

村上 東 梅 枝

賑やかだった夏の信州も、何時しか紅葉の言葉を聞くようになり、又、町にはブドーの香りがただよってむせるような甘い匂いが一ぱいの塩尻ではブドー祭りで賑やかでございます。

先日は、わざわざお忙しいところお手紙下さいまして誠にありがとうございました。大阪の皆様、お元気で、お勉強に、お仕事にそれぞれに御精を出しておられる様子を、何よりもお喜び申し上げます。私も負けずに張切っております。

何時も山行報告書を送って頂きましてありがとうございました。7月にはアンケートを書いて下さいとの事でしたけれど、山行の内容はよくわからないし、唯期間中祈る思いで、無事で山を下りて下さるようと、ニュースで遭難の知らせを見るときなどは、外大の字が無いように、聞かないようにと、そしてホットする、そんな繰返しですが、言葉は通じなくても、私なりに、心は大阪に通じていると思ってつい御無沙汰して了解本当に申し訳ない事をしたと思っております。伊藤さんには、ちょっと書いてお願いしましたけれど。お手紙によりますと、山行記録や、泉坂東さんの追悼、OBとの交歓の場とする部報発刊の計画が出来、編集にあたっていただけるの事、御苦労様でございます。

それに付きましても私への心づかい、もったいない事です。どんなに泉や坂東さんは喜んで下さるでしょう。忘れようとしても忘れられない泉です。今では本当に亡くなったんだなあ実感わいて来ます。大阪の人達が、一時、家に来てくれて泉になって下さって、おかげでウス紙のはがれるようにささえてくれたおかげで、段々寄って下さらなくなっても、悲しみもウスらいで、もう亡くなって8年も経ちました。言いたいほうだい甘えて、迷惑を掛けてきた大阪の人達には感謝の言葉もございません。ブドーを持ってすぐにでも大阪へ行きたい気持でいっぱいですが、勤めの身、なかなか思うように行かないのが残念でなりません。私も一周忌の記念に「山と泉」を作りましたが、編集者の気持がよくよくわかりました。其の時は、泉の供養にと夢中で、一ヶ月ばかり夜になると、一人暮らしを幸いに、部屋中いっぱい書類を広げてまとめたのですが、出来上ってみれば、後、先になったり、先の坂東さんの追悼文が真中に入っていたりで、がっかりしました。

勉強の間に本当に御苦労様でございます。資金も大変と存じます。何のお役にも立ちませんけれど、5千円発刊の費用の足しにして頂けたら幸いです。

15日～17日まで東京の息子の家へ行きましたが、ブドーを持って…。台風になって不通となり、つかれが出て、寝込んで了い、1日延ばして18日に帰ってきてからそのまま又、寝込んで21日まで保育園を休んで了いました。熱は無いし、食欲もあるのにだるくて起上がれないのです。ようやく今日になって、秋空のように気持よくなって明日は大門のお祭りです。私の家でも5、6人のお客様が来ます。息子も明日のお昼頃、帰ってきます。帰ってから私の話をきいてびっくりする事でしょう。その位、丈夫だった私です。永い間のつかれが出たのでしょうか、9

月はさんざんな目に合いました。そんな訳で16日は白馬村での慰霊祭には行けませんでした。

10月7日の上高地での慰霊祭に行って来ようと思っております。

明日の用意やら、病み上りのつかれで心ばかりあせて乱筆、乱文をお許し下さいませ。

気候不順な折、くれぐれもお体を大切になさいますように。

皆様にくれぐれもよろしくお伝え下さいませ。

さようなら

9月22日夜

〔故村上泉君御母堂〕

小 谷 温 泉 だ よ り

丸 山 忠 雄

7月30日朝、新大阪発、北陸線廻りで大糸線の中土着、車で小谷温泉の太田旅館についたのが午後4時をすこし過ぎていたかと思えます。梅雨明けが後くれ、不順をきわめた夏でしたが8月中旬までの二週間あまり、酷暑の大阪を離れて、宿痾をかかえての湯治行で、当節流行の脱都会派が信州へ、信州へとなびくのと軌を一にした形となったわけですが、上信越高原国立公園の中にあるといっても、ここは一般登山ルートとしては雨飾山(1963米)への基地というだけで、観光ブームずれしていない点で、現在の中部山岳公園内の他の温泉とは、根本的に違っているとします。

毎朝のことですが、起床するとすぐに元湯のバス停まで鹿島槍の頭を見に出てみるのでした。元湯に泊っている初発バスの運転手も今日もだめだなと言った日もありました。

三軒の旅館から出来ているこの温泉は泉源がちがっていて、熱湯、新湯と元湯が各二度ずつの温度差があり、小生の泊った新湯でも相当あつい炭酸泉が四六時中豊富に流出し放しで、午前三時すぎなど、浴室の電気を消したまま、溪谷の上空に月が滲んでいるのを、一人でながめていると、日頃、散文的な都会生活を余儀なくさせられている身ながら、レールモントフの「現代のヒーロー」の主人公のマシユク山の麓の湯治場の描写などが思いうかんで幻想的になるのも妙です。

温泉から北西に鎌池があって、いまはまだ車の入る砂利道が通じているだけの自然の別天地ですが、もう一・二年で新開の観光地になって、人害・公害の浪に吞まれる運命にあります。東京の電鉄会社が現在の温泉と谷をへだてて新泉源を入手し、新観光施設を造るのだそうで、現在の温泉経営者達もそれを傍観し、いや、あわよくば一口乗ろうとしているのが、なぜかわしいと云う一部の声もあります。自然の保護と開発という問題がここにも今更のように露頭しています。環境庁あたりが乗り出さないと、どうにもならないのでしょうか。もっとも、このお役所の権力の可能性にも、少々疑わしい所があって、事は一朝一夕には片づかないかもしれません。

いよいよ休暇あけの授業もはじまり、学生達もぼちぼち顔をそろえるようになりました。

〔'71年9月執筆 ロシア語科教授〕

遠くて近き山の友

加藤多嘉志

母校を卒業して十有余年たったが、相変わらずあちこちの山に登ってきている。たい残念ながらここ一年間ほどは原因不明の腰痛に悩まされ山から遠ざかっている。これは昨年五月の連休に、一回り年の違う山好きな会社の連中二人をつれ、北八ヶ岳に登ったが、年甲斐もなく、例によって重いザックをかつぎ、ドジャブリの雨の中を歩きまわったのが祟ったものと反省している。

最近になってようやく痛みもとれ出し、またぞろ山恋しの虫が動き出してきている。

ところで、現在勤務している会社にも結構山好きな連中がおり、数年前にワンゲル部が発足した。ぶらりと参加したところ、オールドボーイでもあり、たちまち世話役をおおせつけられ、爾来足を突っ込んだまま今日に至っている。

月一回の例会と毎年夏には北アルプスへの特別山行をやっており、計画書の作成から反省会まで、なかなか規律のある活動を行っている。また当社には日本山岳会員の望月達夫氏もおられ、山の話聞く会を催したり、京都北山や大峯山など近郊の山々へ山行を共にするなどして、大先輩の山歩きに多くのものを学んでいる。

山歩きは一人でも面白いが、やはり気の合った仲間とやるのが一番である。特にテントかついで山行は楽しい。夕食後のひととき星空を見上げながら、山の歌をうたったり、山の思い出ばなしに花を咲かすのは最高である。そんな時いつも先導をつかさどるのが小生である。

若い仲間、古い山の歌や、古い山の友の思い出を、エピソードをまじえつつ語るとき、青春の感激は新たに甦えてくる。

学生時代に苦楽を共にした山の友だちは、二・三の友を除き遠くに去っているが、私の心に折にふれ甦えてくる。げに遠くて近きは山の友である。 (〇-34年卒)

At Houston

坂田 暉

お手紙ありがとう。うれしく拝見しました。大阪外大山岳部創設15周年記念部報行計画中の由、是非頑張って発行されんことを希望します。

とにかく発刊することが大事です。あまり立派なものと高望みすると、かえって出しにくくなるかも知れません。内容よりもむしろとにかく何らかのものを出すことに主眼をおいて、発刊に意義を見出すことの方がより大切かと思考します。

僕が在学中も何回か部報らしきものの発刊を試みましたが、果せなかった理由の一つは、部報として出すからには恥ずかしくないものをとという気負いのあった事を記憶しています。

あまり体裁にこだわらないで、数ページのものでもとにかく出すことです。

僕が外大に入学したのが1957年、ずい分昔の話です。

1957年4月のある日、山好きの奴は集まれという掲示をみて集まったのが最初。

10数人集まった中に、背のひょろ高い、ギョロリとした目付きのあまりよくない男が高橋洵(D)でした。西前(H)、田村(R)、村上(D)、加治(P)、山本(O)、加藤(O)、西川(H)、オクダ(IN)、等々、そして小生など集まったことおぼえています。

それまで山好きの連中がグループを作って時々近郊の山に登っていた様ですが、部ないし同好会としての集まりはなく、57年4月の集まりが同好会としての発足ではないかと思えます。

その時集まった連中の大半は山登りに全くの素人で、大町南高校出身の高橋、及び西前(当時関西登高会でしごかれていた)の御兩人をリーダー格に、夏の山行準備にかりました。何しろみな素人故、キスリング・靴など最低のものを整え、夏季合宿と銘うって南ア(甲斐駒一仙丈一北岳)縦走を計画したものです。

互いに分担して必要品を整え、伊那北から戸台川を赤河原まで行きました。

確か、ラグビーの連中とかの参加もあり総勢17・8人ではなかったかと思えます。

伊那北からのバスは少し前の台風で途中までしか行かず、赤河原まで行くのに2日程かかった様です。意外に重い荷物にみんなバテにバテ、又炊事もお租末で、八丁坂では東京女子大だったかの立派な隊列に吃驚したりしたものです。

仙丈直下の泊りでは何人かは寝袋がなく毛布しかもっていなかったもので、寒くてねられなかったり、野呂川を俣の幕営では台風でテントが飛ばされかかったり、仲々愉快的思い出があります。

又、北岳の登りでは奥田がキスリングの上につけていたでっかい釜を、はるか下まで転げおとしたり、北岳の尾根では強風下、数人がバテバテになり、北岳小屋緊急ヒナンなど、計画通りに決して進まなかった、いうなれば珍山行でした。

帰路、西山温泉でアカを落してみんなヤレヤレとなりました。

それ以後、大体春夏秋冬には定期的に合宿らしきものを行ない、少しずつ恰好がついてきました。西前を主体とする先鋭的ロック班と高橋を中心とする趣味的登山のあり方と、二つの行き方の違いはありましたが、僕らの時代で何とか山岳部らしくなっていた様に思えます。

一時は田村を中心にしてコーカサス遠征の話にも大分熱中しましたが、USSRのコンタクト先の選定をまちがったのか、上手くゆかず立ち消えになりました。卒業後も山登りは捨てがたく、尤も山歩きしか出きませんが、高橋・田村らとは何回か近郊の山に出かけたりしています。

3年前、当地に来て以来、山のカケラも見えない広大なテキサスの地で山登りどころではありませんが、コロラドまで出かければ高峰が連らなっているのですが、未だに足を踏み入れられません。

テキサス州は日本の国土の2倍、その大半が全くのプレーン・フラットです。ヒューストンから一日車でとばしても山らしきものはおがめません。ただただ大きくて、日本人の感覚には仲々ミートしません。

これからいつまで当地にいるか分かりませんが、山岳部の総会（OB・現役を含めて）でも開催されれば是非出席したいと思っています。

今後の貴兄はじめ、部員諸君の御健斗を祈念致します。

（'7.2.7.26 ヒューストン発、編集子宛書簡。 R-36年卒）

ロサンゼルスより

橋村 専之

9月15日付お便り拝受いたしました。今まで何回となく山行計画等の配布をいただきながら、そのうちそのうちと思いつつ返事をせずたいへん失礼しました。

このたび部報編集のご計画の由うけたまわりまことにうれしい限りです。

原稿といえましても改めて書くほどの腕もありませんので思いつくままに貴兄へのレターというつもりで下記にしるしますので適当に添削して掲載していただければ幸いです。

山のこととなりますと誰もが同じこととは思いますが、思い出のつきないもので、久方ぶりになつかしい旧友の名前を貴兄のお手紙に拝見しますと、ありとあらゆる思いで、頭のすみの方から一度に表にでてくるようで剣沢の合宿（私の長男を剣一つるぎと名づけていますが）、ハッ峰やチンネの岩肌の感触、遠見尾根のラッセル、後立山の縦走、南アルプスの縦走……と、とどまるどころを知りません。

卒業後は、一・二度合宿に参加させていただいたり、会社の山岳会で山歩きをしたりして山を楽しんできましたが、はや卒業以来11年余、現在はたまの休みも、女房・子供をつれてとなりますと身動きもとれず、せいぜい車でいけるところに限られてしまう今日のごろです。

みんな単に山が好きで、山に登るのであって、何かの効用を期待して山登りをする人はあまりいないと思いますが、今考えて学生時代に山をやっていたおかげで、体力はもとより、精神的にも、健康に注意するクセとか、忍耐力とか、チームプレーとか、急に困ったことが起きてあわてないとか、諸々の訓練ができたように思います。そのような時ごとに学生時代の山登りのことを思い出しては楽しんでおります。

現在はロサンゼルスに來まして、約2年になります。こちらの仕事としては、アメリカ人の日本旅行のお世話と、日本から來られるお客様のアメリカ旅行のお世話を主として行っておりますので、こちらで何か皆様のお役にたてることがございましたら、なんなりとお申しこし下さい。

それから、今までいろいろ通信して下さった郵便代も少くないと思いますし、今回の部報発行にも相当の費用がかかると思いますが、どれくらいの額がよいのかピンと来ませんので恐れ入りますが、誰か、奥田君にでも、誰でも相談いただいて適当額をお知らせ願えませんか。それから

送金方法は、いちばん手軽なのはドルの小切手 (Personal check) を送ることなのですが、それでよいのかどうか、その場合は誰を受取人として、小切手を切ればよいのか、もし小切手はよくない場合はどうゆう方法が一番よいか、お知らせ願えれば幸いです。

先輩、友人の近況をお知らせいただきありがとうございます。大変なつかしく拝見いたしました。在阪の皆様にお会いになりましたらくれぐれもよろしくお伝え下さい。

それから、むろんお会いしたこともありませんが、吉田隆三さんが交通公社に来年入られる由、よろしくお伝え下さい。

〔'72.9.28 ロス発、編集子宛書簡。 H-36年卒〕

山 行 雑 録

(昭和34年4月~38年3月)

広 瀬 州 男

10年以上前の記録のため、資料もなく、記憶を頼りにまとめてみた。事実と食い違う箇所も多々あると思うが、御寛容願いたい。

(1)昭和34年4月~5月 北ア穂高岳合宿

5月1日以外は大体晴の天候で、残雪の登山が楽しめた。徳本峠越えは14時間を要し、私の山行歴中、最も苦しい歩行であった。それだけに、峠からみた黒々とした明神岳、前穂岳のシルエットは、今でも鮮やかに思い出される。装備は今と違って、アメ中のテントを奥田氏が冬用に改造したものが中心で、快適とは云えなかった。金銭・装備の欠乏した山岳部であった。

(2)昭和34年7月~8月 劔岳定着 劔一槍縦走

ロッククライミングを始めて行なったなつかしい合宿である。冷い岩肌の感触が忘れられない。チンネでは、いっばしのクライマー気取りで、意気盛んであった。縦走は、劔一槍以外にも後立山に1パーティ出発。10貫以上の重荷の縦走はこたえた。野菜や米を大量に携行したためであるが、これにこりて、以後の山行は、超軽量方式にきりかえた。この縦走で、北アルプスの地形を全て頭にたたきこみ、後日のプランに役立てた。本来は西穂高まで足を伸ばす予定であったが、地下足袋で行った為、槍で足を痛め、下山したものだ。

尚、この時は、黒部川には橋はなく、ザイルを張って徒渉している。又、薬師沢コルー薬師沢出合いまでも、かすかな踏跡程度で、今日の様なにぎわいはなかった。

(3)昭和34年11月 春山用荷上げ 劔岳

春の劔岳合宿に備えて天狗小屋へ荷上げを行なう。西前氏・高橋氏は、劔岳へ岩登りに。荷上げ後、西前氏と二人で大日尾根を歩く。誰もいない静じゃくそのもの大日岳。まだ雪化粧をしていない劔岳の赤茶けた西面が不気味であった。

(4)昭和34年12月～1月 白馬岳冬山合宿

新入部員は全てスキー練習で、上級生のみ白馬大池経由で白馬本峯にアタック。天候定まらず雪崩の恐れがあり、本峯までは行けず。人員が少なく、前進キャンプを作れない弱味もあって、冬山合宿は低調であった。

(5)昭和35年3月 春山合宿(立山)

春は、立山組とスキー組の2パーティに分散。立山パーティは、新入部員は私一人が参加し、荷上げのみ協力して下山した。

(6)昭和35年 6月 南アルプス仙丈岳

(7)昭和35年 7月 劔岳定着合宿

(8)昭和35年 8月 後立山朝日岳-白馬岳縦走

(9)昭和35年11月 穂高岳

(10)昭和36年 1月 穂高岳

(11)昭和36年 7月 劔岳合宿 南アルプス縦走

(12)昭和36年 8月 後立山縦走

(13)昭和36年11月 焼山偵察山行

(14)昭和36年12月 焼山合宿・妙高スキー

(15)昭和37年 5月 岳沢-前穂-奥穂-北穂高

(16)昭和37年 7月 劔岳定着合宿

(17)昭和37年11月 烏帽子岳-水晶岳-双六岳-蒲田

(18)昭和37年12月 五竜岳冬山合宿

(6)～(18)は残念なことに記録が皆無である。唯云えることは、34年入部の全員が、体育の単位がとれずに、(10)の冬山合宿に行かなかったため、奥田氏に多大の迷惑をお掛けしたことを、改めて、誌上にてお詫び致します。

(14)の冬山合宿も、部員の経験不足で、ベースキャンプの笹倉温泉で沈でんしたのみに終り、この頃のサボりが、後々まで尾を引き、山岳部の空中分解寸前まで発展したのである。

以上の記録は、公式に部の合宿又は、それに近い形でなされたものであるが、これ以外に個人山行が、行なわれている。昭和36年～38年春にかけては、むしろ個人山行の方が活発で、部員各自が、自分達に向いた形や、山に出かけていった。逆に云えば、個人志向が強かったため、全員で行なう合宿形成がとりにくかったとも云える。

針の木の小屋にいたとき

百瀬 泰

長い休みの前になると、いつも借金をかかえ、思うように合宿には参加できなかった。

村上の遭難した年の夏山合宿はあったのか、中止になったのかおぼえていないが、その時も合宿にいけず、針の木の小屋に入った。

坂東と阪本が小蓮華から不帰をまわって下におりたという連絡があって、一緒に村上のお墓にいった。お墓は山ぎわの、赤レンガの煙突のある焼場のすぐそばにあった。せっかく来てくれたのだからといって、村上のお母さんは塩尻峠につれていってくれた。皆でアイスクリームを食べながら、諏訪湖を見おろした。

針の木小屋では、ある夕方、立山の一の越山荘の者だというアベックが来た。男はめがねをかけ、まだ若いのに、昔はこの針の木沢ではよくオッサン（熊）にであったものだ、といって、なかなか口の達者な奴だった。女はこれという特徴はなかった。その夜は美江さんは下におりていて、相談もできず、山小屋の仁義に反してもいけないと思って、丁重にあつかい、宿泊代はただだかなかった。男は、もし立山に来ることがあったら、名前を出してもらえばうれしい、といって帰っていった。

九月に入ると、山小屋は一段落して、ギューさんと二人だけになった。平の小屋に行っていわなを釣ることになった。立山をまわってきってから、平の小屋でギューさんとおちあうことにした。美江さんからは、一の越山荘と剣沢小屋のブンゾウ氏あてに、針の木の小屋の者ですがよろしく、と名刺の裏に書いてもらった。平の小屋へのおみやげとして、一斗カンに米と野菜をいっばいつめて、夕方出発した。南沢の出合で暗くなり、川原の木の下で砂の上で寝た。平の小屋で荷物をおろし、二三日したら針の木からもう一人来るからと伝えてでかけた。御山谷に入るころは屋になっていた。みちらしいみちはなく、ところどころに、ダムをつくった時に弥陀原から油を送ったポリのくだの破片がちらばっていた。いきあう人もなく、だるくなって歩くのがおっくうになっていた。真暗くなって一越山荘に着いた。旅館のような部屋に通された。

朝から雨が降った。以前針の木に来た男の名前を出してみたが、無愛相に知らないと答えた。しばらくして、大工にそんな名前の方がいたかもしれないといった。料金は六割だというので、黙ってだした。それから天狗の小屋に行ったり、剣岳の小屋に行ったが、雨は降りやまず、剣にも登れず、部屋の中にくすぶっていて、することもなく、つらくなって小屋を出た。秋雨の中に、イワカガミの花がぬれて咲いていた。イワカガミの花をはじめ知った。……

後をふりかえりもせず、もみじの中を雨にうたれながら、走って雷鳥沢を下り、東一の越に出て、タンボ平を下った。夜には平の小屋についた。ギューさんは来ていなかった。酒といわなのくしざしを出してくれた。主人は、松本の須沢に会ったらただではおかない、と怒っていた。槍で冬山の映画のロケがあったとき、荷物をかつぎに行った。その時槍沢のボツカ須沢がいばっていたというのだ。立山の雪は槍の雪よりも重いから、立山一族の方が力があるといった。バスの車掌

をしていた奥さんと一語になったばかりだった。

ギューさんは来そうもないので、針の木に帰えることにした。針の木沢をのぼりつめると雨があがり、急にはれた。雲の切れまからギューさんは手をふっていた。剣もはっきりとあらわれた。秋は更に深まったようだった。

台風が近づくというので、窓に板をうちつけ、学校にもどった。授業がはじまってから三週間もたっていた。ぼんやりとした日がつづいた。なんのために大阪まで出てこなければならぬのかと思いをながら。

〔M - 41年卒〕

TさんとMさんと

蓮川博凡

昭和の30年半ば、といえば、わずかに十余年前にしかすぎない。

そのころ、私が知り合ったTさんは、寸借の名人だった。山奥の信州から浪速の町に、飛びだしてきた、一見、むくつけき男児だった。その風半の割に、必要なしなを、ことごとく借り回るトコがあった。

名人技は、例えば、こんなぐあいだ。山行プランが樹つと、Tさんは、まず最初に、友だちから金目な品を借りてくる。それから質屋へ—金を借りてくる。「これで資金はOK」。しかし、それからが大変だった。登山グッズはもちろんザックにズボン・シャツ、はてはパンツのヒモ…貸し方を搜し回る。めぼしい貸手を見つけると「ヨオー」と一声かける。ヒゲ面をほころばせ「まあ、酒でも飲もう」とくる。こんなペースで、調達は見事だったが、奔走のあげく、なけなしの資金を使い果たす始末だった。といって、ここで名人芸が、断じて、ひるむわけではない。何しろ山行が近づいているのだ。とどのつまり、Tさんは、大阪の下町、桃谷の、下宿屋のおばはんをアタックする。まるで、まじめな顔付で拝借を願いでる。何と十人目の親類が不幸にも死にひんしている—といった口実で。こうして再度、資金をつくり、「イザー、出発」といった風だった。

いま思えば、当時、Tさんは丸っきり借物づくめで、わずかに自前は、毛むくじゃらな四肢だけだったようだ。

こんなぐあいだから、山へ行っても、Tさんはスタスタと歩き回る。無屯着な風情が、へんにおかしかった。

この寸借Tさんの同宿に、これまた信州出身のMさんがいた。Tさんを一回りか三回りか、むくつけくした風半。何しろ、大阪にいたるときと、山にいたるときと、寸分も相違ないイデタチだった。町も山もいさ—というのだろうか。このMさんは揺ぎないクセをもっていた。いや、確固たる哲学とさえ、思わせるほどだった。つまり、分れ道に差しかかると、必ずやアヤシクな方の道を選ぶ。ズンズン、独行で進み、姿を消す。分かれた他のメンバーがブツブツいったり、待

ったり、あげくには「オーイ」と叫んだりする。Mさんは、ほどなく、ブッシュをかきわけ、一直線に歩いてくる。茂みから登場する様は、クライマーどころでない、「山男」がピッタリ。山の男というに近かった。

当時、小指ほどのフィンガー・フライとか呼ばれるものをよく食べていたようだが、お世辞にもウマイしろものではない。しかし食わざるを得ない状況では、食うしかない。この単調な食生活をMさんは得意のゲテモノ食いによってバラエティーに富ませていた。道端に落ちている、例えば、夏ミカンの皮をポリポリ食う。丸っぽ無表情に食うのだから「この皮こそ、まぎれもない好食糧だ」と、私は思い込むため努力するほどだった。

この山の男、Mさんに、最近、会った。当時のガツチリした骨格が丸味をおび、肥えていた。十年前、山道で食った夏ミカンの皮、その中身の方は、一体、だれが食ったのかと——私は考えあぐねていた。再会してナゾが解けたようだった。十年前、山中で内実を見せなかった、その中身の部分を、Mさんは、今ごろになって、忘れ物が戻ってきたかのように、胃袋に納めているに違いない——連想が走ったからだ。

〔B-38年卒〕

あ る 体 験

山 田 昭 一

入山以来連日雨。行動らしい行動は何もしていない。わずかに半日の雪上訓練と半日の散歩のみ。二人の新人にとっては初めての合宿であるというのに。雨というものは、新人達にとってはしばしば或る種の安堵をもたらす“恵みの雨”となり得るものであるのに、また時には上級生部員ですら、あまりに晴天が続き、ハードスケジュールが予想に反して予定通り消化されてゆき疲労が蓄積されてゆく時、雨乞いをしたくなることもあるというのに、こう毎日毎日降られてはさすがに恨めしく重苦しい。しかも、その前夜はことさら蒸し暑く、昼間の惰眠の反動のせいもあって寝苦しかった。四人共仲々寝つかれず、シュラフから半分身体をむき出しにしたまま、とりとめもない話をもてあそんでいた。それでもいつの間にか、余り深くはない眼りに落ちていった。

「水だ！テントを移そう！」リーダーの声を聞いてもそれ程の重大な響きを感じなかった。何となくモソモソと起き出したら5cm程の床上浸水。「ああ、シュラフが濡れてしもたナ」などと考えた。薄暗いテントの入口付近で上級生二人がテントを移動させる準備をしている。「靴を穿け！」という声を聞いてまず靴をいた。この時にはもはや膝下くらいまで水が来ていた。そして、もうひとりの新人が靴下を穿き乍ら「靴が、靴が！」と云うのを聞いて彼の靴を探そうとしたが、その時には水は膝を越え、テントの中には大小の石コロが流れ込んで底面を占拠し、とても靴など見つからない。「靴はないゾ！」と叫び、目の前に浮かんでいた自分のヘルメットをおもむろにかぶり、倒れかかったテントや、流れ去ろうとするザックなどを必死に押さえた。この時水は既に腰のあたりまで来て、自分のバランスを保つのが精一杯で、押さえ込んでいる荷物をどうすることもできなかった。そして足元に大きな石がぶつかり、バランスを失って一歩後退し

ようにしたとたん、激流に押されてズルズルと数歩後退し、危うく呑み込まれそうになった。岸にのがれていた三人が何か叫ぶのを聞きながら必死にもがいて、辛うじて5m程下流で岸に上ることが出来た。ホットして三人の所に戻ると、彼らの足元にザックが三つ、シュラフ一つ、ピッケル二本、グランドシート一枚がみすぼらしく散在していた。そして、それらの中には、自分の装備は何ひとつ見あたらなかった。劔沢の激流の中を石が流れて行く無気味な音を耳にしながら、寒さにうち震えて呆然と立ち尽くした。雨は止む気配もなかった。

その日、猛吹雪をついて六・七のCOLから退却してきた。夏なら一時間の行程をまるまる一日がかりで、八峰には御殿のような雪洞がそのまま残っていた。北尾根に敢え無く敗退し、明日は下山である。無念さと安堵感を三人はそれぞれの胸の中で交錯させていた。すっかり無気力になっている三人は何をするのも億劫であった。しかし外は相変わらず吹雪いている気配で、雪洞の入口に吹き溜まった雪を放っておくわけにはいかない。いや、リーダーを除く二人は、それすらしないで済ませたかった。しかしリーダーの決意は堅く、渋々二人も同意した。しかし雪かきに三人も必要ではない。では誰が？ 大抵の大学山岳部なら、当然、新人の仕事となる筈であるが、幸いなことにこのクラブの民主主義は徹底しており、平等な条件のもとに厳正なるジャンケンが行なわれたのである。そして、しかし乍ら、その過程がどうであれ、無慈悲にも、あわれにも、結局は新人君が雪かきに出動せねばならないこととなったのである。まず入口のツェルトをはらいのけると、ドサッと雪が室内にナダレ込んで来た。その雪の中を泳ぐようにして外に這い出した。すると、何んと、外は吹雪どころではなく、月明りが皓々と四囲を照らし、満天の星が輝いていたのである。純白の洞沢大カールには奥穂や洞沢岳の影がくっきりと映り、南稜の末端には洞沢小屋の三角屋根が浮かんでいる。とてもこの世の光景とは思えない。えも言われぬ不思議な光の世界。心の中まですきとおるような透明無垢の世界。頬に吹きつける風の冷たさも忘れ、すっかり魂を奪い取られた新人は、そこに立ち尽くしていたのである。

源治郎尾根縦走隊と別れた三人は、ブッシュ帯をトラバースし、中央ルンゼの上部を通って一峰平蔵谷側上部フェイスの取り付けに達した。クラブでの精鋭とも言える三人のパーティ。しかも前日までの鬱陶しい天気とはうって変わった快晴。しかしながら、その割にはあまり意気はあがらなかった。何となく登りに来たという感じであった。トップが一ピッチ目を登り始めた。かぶり気味のところを右から捲いて越えると、あとは階段状の草付が上のテラスらしき所まで続いている。「なんやこれは。道みたいなところヤゾ！」と余裕を誇示するかのようになり、取り付け点の二人に声を掛け、無造作に登って行く。残置ハーケンは見あたらないし、打てそうなりすもないし、また実際、打つ必要などなさそうであった。「ザイル半分！」と下からコールが掛かり、「オーケー！」と応える。そしてそこで急に行き詰ってしまった。泥状の壁にステップを蹴り込み、ホールドを掴んだとたん、前日までの雨でゆるんでいたその岩がはがれ、「アッ」とひと声発したまま無重力の世界に身をおどらせた。「ああ、俺は落ちているんだなア」と何の恐怖もな

く思い、空が視界にはいり、また消えてゆくのを眺め、やがて肩から背中あたりに何度か何度も何度も激しく何かにつかるのを感じた。突然、重力の世界に引き戻された。そして、傷の痛みよりもむしろゼルプストに身体が締めつけられている苦しさに呻き声をあげ、漸く昂ってきた恐怖にうち震えて横たわった。

〔 C - 4 〕

山 男 の 論 理

—— 断片的に ——

船 井 総 一

山が好きで人間は世の中に掃いて捨てる程居る。山に登ったこともないのに「山は素敵だわ。」という人間も多い。それも都会の人間に多い。女が圧倒的である。その点男は素直であるから「なんであんなえらい事をやるのか。」と言う。私などは女性に「山って素敵ネエ。」と言われると、顔では「へへへ…」と笑いながら、腹の底ではいつも「山に登ったこともないくせに。」と思っている。元来、女というものは論理的思考には甚だ弱いけれど、夢みる乙女の言葉通り、想像は全くたくましい。女は山を見て、その高さ、豊かさに胸打たれ、その険しさに驚き、その深さに恐れを抱く。そしてその結界、登山者の姿を想像し、山に登る困難を頭に描く。そして早々と「私に出来る筈がないわ。」と結論を下し、己れに出来る筈がないが故に、山は憧れと転ずる。これが正にフアン心理である。女共が男の歌手に悲鳴を上げるのも、己れの手が届かないが故の憧れが高じて狂気となったばかりで、本質的に変るところはない。女とはそういう速断型単純動物である。私はここで女性論を展開する考えは毛頭ない。ただ山に登る側の論理として、山登りの実践なしに、上高地を散策したぐらいで「山って素敵ネエ。」と言ってもらいたくないものであると言おうとしただけである。どちらにせよ、このことばは女の軽薄さいかえれば女の可愛さから出たことばで、確固とした根拠はない。反対に女に「なんであんなことをするのよ、バカネ。」なんて言われると、私は一生涯その女の顔も見たくないし、声も聞きたくない。あわよくば殺してやろうかというまでにも逆上する。こういった場合は、相対的に男の方が可愛い。

ここに一つ奇妙な現象がある。それは山女の出現である。これも近來のウーマン・リップの産物かと思われるが、この運動自体が衝動的で、あまりにも男と同化したがる傾向がある。その男と同化したがる様は、自らが自らの劣等性を証明していると思えてならない。そうだからといって女は山に登るなど言う意味ではない。たとえば、テニスが見ていて優雅で楽しいのは、あの女性のひらひらした短いスカートに、依ると言っても過言ではない。そしてスカートのひらひらからちらちらするの健康を感じるのであり、最近女性が階段を昇る時に、後に荷物やハンドバッグをあてがうのは、自分から自意識過剰を表明していることとなる。あの姿を見る男は彼女らの精神の不健康を感じないわけにはいかない。そして世の中の男を代表して、断じて言っておくが、彼女ら自身が考えている程、見る方には見えていないものである。

しかし、現実問題として、スカートをはいて山へ行けば、不都合は歴然としている。もし私がスカートをはいた女性と岩登りでもすることになったら、決してセカンドでは登らない。セカン

ドで登れば、どこかで足をふみはずして落ちるか、さもなくば、昼食も喉に通らない程胸が悪くなるだろう。しかしながら、女がニツカズボンをはき、一週間も十日も風呂に入らず、髪の毛をふり乱し、靴下のずるのも構わずに黙々と山を登っているのを見れば、百年の恋も一瞬にして醒めようというものである。だから服装にだけ関して言えば、彼女達はもっと機能的でしかもファッション性のあるものを考えるべきである。

けれども、今の若い女にそれだけの能があるかどうかは、甚だ疑しい。何故ならば、彼女達は流行の虜で、何かが流行ると、それに対する反応は驚く程敏感であるが、反応と同時にそれら全てを受け入れてしまい、それら流行物に対する批判など入り込む余地は全くない。たとえ多少の批判があったとしても、それらは流行という化け物に押しつぶされてしまう。勿論、新しいものをどんどん取り入れることは良いことであると思うし、取り入れて後、批判して不要の部分を切捨てることはなお良いと思う。しかるに、抵抗を示した後、既に流行となったものに追随する人達の何と多いことか。たとえば、ラップズボンと呼ばれていた時、不遇をかこっていたのに、パンタロンと呼ばれるに至って、ラップズボンはイメージを一新し、すい星の如く服飾界に現われたというのは全くの錯覚である。しかし、私が百貨店の婦人服売場の人間であったとしても、決して「お客様、ラップズボンをお求めでしょうか。」とは言わないであろうし、そんなことを言ったら、客に横っ面を殴られた上、即刻クビになってしまう。世の中の人々が皆錯覚して、錯覚ではなくなってしまった例である。

もしも、世の中の人々がすべて記号論理学の手法を身につけ、錯覚など存在せぬものになったら、私は生きていく気がしないだろうし、少なくとも恋や愛はばかげたものに感ぜられるようになるだろう。なぜならば、この女は素晴らしいという錯覚をしなくなっており、いつも相手を分析的にしか見られないのだ。あばたはあばたでえくぼはえくぼとなれば、実に淋しいことではないでしょうか。更に悲しいことは、相手の女性も私のことを、あばたはあばたとしか見てくれないのです。だから女の子の悪口ばかり言うものではないのです。時には、自己暗示にかけてまで自ら錯覚に陥らなければならぬこともあります。しかし、私はいつもその錯覚から醒めた時にえくぼが何に見えるかを考えてしまうのです。だから、錯覚から醒めた時に、不幸が起らない様に、男はいつも冷静であるべきだし、女の子は化けの皮を絶対にはがしてはいけないと思う。だから女の子は山に登ったりせずに、「山って素敵ネエ。」と言っている方が良いのかも知れない。

(8 - 4)

山 と 私

中西直文

私が外大山岳部に入部したのは、1年生の7月頃だったと記憶している。動機は、入学当時の空虚さから何かやってみたいとの単純な衝動であった。ある日近鉄電車に乗っていた私は、たまたま高田氏と知り合い、あれやこれや話しているうちに、氏が山岳部員であることを知った。氏

曰く、「うちの部は危い所へ行かないし、仮にそれと気づいたならばすぐ退却する」といった一言が、私の決心をうながした。いざ入部してみると、真黒に日焼けした3年部員、どことなく山に登る顔をした1年部員（原のこと）の存在、人間性などが気にかかった。今になってようやく、彼達の山に対する考え方が多少は分って来たが、自分自身のそれとはかなり違っているようである。

さて練習初日となるのだが、部内でトレーニングと称されて行なわれているのは走ったり、体操するのではなく、主に岩登りであったのにはいささか驚いた。実は私、入部する前まではロッククライミングをやるなんて思ってもみなかったのである。というわけで、何も知らずホウライキョウへ引卒され、トラバース、ザイルワーク、登山用語などを教えられた。アップザイレンの時などは無性に入部した自分と、これを強いる3年部員に腹立ちを感じた。私は、山登り、特にロッククライミングは岩、ザイル、ピンोट、それに人間に対する信頼性の度合いが第1要素で、技術は2次的なものだということを経験から思うのである。要するに私の最初の岩登りには、すべてに対して全く信頼がなかったのである。それ以来、このようなトレーニングを数度くり返し夏山合宿、冬山合宿に参加し、2年生になってからも五月山・夏山合宿を経験し今日に至ったのである。これらの経験を通じてある程度の信頼と自信が持てるようになった。入部以来1年3ヶ月を通じて跡を回顧してみた時、思い出されるのは山の厳しさのみである。その厳しさの中で、曲りながらも今までやってこられたのは諸先輩の力に負う所が多々あった。

では、なぜ人間は山に登るのか。山に身を投じることを覚悟してまで……。また私は山の厳さを知りつつここまで来たのか。世間には登山家を過大評価する人、一方否定する人がいる。後者の人たちは、命をかけてまで征服感と自己満足を得るのは、もはやスポーツではないと主張する。前者の人たちは、登山こそ自己と自然との斗いで、これこそ真のスポーツだと反発する。私が思うに、登山家とは命をかけて山に登る人でなく、絶対に山では死なないんだということを、理論的に認識できている人をさすと思う。だが、現実には登山家の中でも山で生命を絶つ人がいる。この事実から私には「不可解」の一言しか決論として出てこない。この山の不可解さの中に「山の魅力」がある。不思議なことに、いくら山行が厳しくても、死に直面しても、一度その征服感を味わってみると、下山して幾日か過ぎたら、また登りたいという望みが湧いてくる。まるで麻薬のような力を内に秘めているのである。私の場合も同じである。この夏山縦走で完走した瞬間、「やった！」との感激がこみ上げた。その瞬間までの苦しさや危険度が増せば増す程、感激も大きい。

なんて登山家は、私は、人間は「バカ」なんだろうと思う。その上、この「バカ行為」を人間性といとも簡単に結びつけることもやってのけている。私はこの「バカ行為」を敢えてやっている2年部員である。

大窓ビバーク行

吉田 隆三

今日は定着合宿最後の山行、ビバーク山行である。我々吉田・古田・水谷の新入部員は連日の好天ですっかり体力を消耗して今日の山行決定にしょげきっている。山田・榎野の4年部員は日まじに気力が充実していく様に見えて何だかねたましい。我々の戦意喪失に腹をたてているようだ。我々は小ひつじの様におどおどしている。

二股までは歩きなれた道を今日も歩くのかと思ひ、ピッチの早さに少々腹も立った。水谷が足をくじいて痛々しい。二股で古田が今日の記録係を命ぜられたが、我々新人にはそんな気力もない。結局、新人三人が連帯責任で記録をすることになったが、連帯責任は無責任である。仙人山までは階段がずっとついていた。早めしを喰った休ケイ地点から仙人池のヒュッテと小窓の雪渓が見える。小窓側に虹がかかって美しかった。池の平小屋への道から池の平山の岩場が見える。赤い、もろそうな岩に思えた。小屋のトイレの横から、ガラガラした溝のようなゴミ捨て場のよりの支谷を下る。ナベをつけている水谷氏はくじいた足をかばいながら、情ない顔をして、ひっかけひっかけ下ってくる。すぐ雪がでてきたので得意のグリセードで下る。大窓雪渓との出合附近で雨が降ってきた。急いでカッパを着たが、4年部員はのろいといって、我々をせきたてる。見ると自慢のカッパも連日の使用であちこちコーティングがはがれている。大窓の雪渓を登りはじめると、雨で岩がゆるんできたらしく、あちこちのカベで無気味な音がする。中程まできた時大きな岩が音もなくすべり落ちてきた。雪渓の傾斜はゆるやかで1ピッチで大窓にはい上る。このころには雨はやんでいたが、ガスがかかって日本一という大窓もただのコルにすぎなかった。テントが一張あったが、だれもいなかった。ここから反対側の白萩川は4年部員にも未知のルートである。ブッシュとガラ場で一見路はなさそうであったが、踏み跡はずっとついていた。ブッシュをかきわけかきわけ下降していくと、ブッシュの中に明らかに人工と思われる石垣が二、三見られた。忠実に谷底を路は下っていた。両側から落石の音が絶え間なく聞えてくる。ブッシュがなくなってからはまったく一步一步に落石の恐怖を感じる。先頭の山田氏が少し左側に寄りすぎたなと思ったとたん、足もとの土砂が崩れて1メートル程すべり落ちる。運悪く手の指を石でサンドイッチにされてずいぶん痛そうである。先頭を榎野氏がかわって行く。次第に谷を高巻いていって前進不能となった地点でアップザイレンをしようと相談していたが、結局、落石しないのが不思議な位の泥カベを後向きになって下る。ホールドが不安で仕方がない。無事に降りてから次の滝を下ったが岩が落石の跡であちこち白くかけている。ようやく雪が出始めてきた。薄くて、クレバスの走っている雪渓の上を榎野氏は一步一步ピツケルで確かめながら行く。この雪渓は河原に降りたつまでスタスタに切れていた。河原に降りてからビバーク地点の雷岩までは、それまでの路とは別天地の様な気がした。4年部員2人は市大のプレハブまで訪ねていった。残る我々は危険なルートを選んだ合宿プランナーの悪口を言いながら夕食を作り始めた。私は流木を集めてきて盛大なファイヤーの用意をした。古田が風邪でしきりに鼻をならしている。疲れ切っ

あまり情けないのと空腹とから元気そうな4年部員に無性に腹が立ってきた。出来上ったおかずの肉を3人でちよろまかしているうちに4年部員が帰ってきた。市大小屋のクズかごから得意のゴミあさりでクッキーやビスケットをおみやげに持ってきた。心の中で赤い舌を出しつつ、ありがたく頂戴した。日が落ちるまでキャンプファイヤーを囲んで雨に濡れた衣類を乾かした。私はファイヤーの跡を土で盛ってから寝たが、足元が熱くて寝られなかった。

翌朝好天であった。小窓尾根1600米乗越を越えて池の谷に降り立つ。右俣と左俣の合流点で昼メシを喰う。富山の町が見えてきて町がなつかしかった。左俣から見る小窓尾根も剣尾根も、もう二度と来ることもないであろう私にとっては何の感動も呼び起こさない。雪溪を上ってガラ場に入るところは、私も完全にバテてしまった。三の窓雪溪を一気にグリセードで下って二股で休んだ。榎野氏は三の窓から本峰へ登っていった。二股で非常食をほとんど喰い尽してから、我々新人3人はB0に戻った。山田氏は勿論、榎野氏までもう着いていた。 (S-2)

岩 登 り

水 谷 温

今年の4月に山岳部に入ったばかりの私にとって、合宿は5月合宿につづいて2回目だが、岩登りは今度の合宿が全くの初めてだった。夏休み前にすこしは岩登りの練習があまり好きとは言えなかった。ハンクンやハンマーの鉄のかたまりを見ていると恐怖心が湧いてきた。

7月24日、六峰フェースを登る前夜、明日のためハンマーやシュリングなんかをザックにつめていた時も同様の気分だった。しかし、何となく期待に似た様なものもあった。

当日、私と榎野さんと2人でDフェースを登ることになった。用意が終って榎野さんが登り始めた。上を見上げて見守っていると興奮してくるが、榎野さんの体はすぐ見えなくなった。ザイルが時々、しばらく止っていると、ズズッと上がる。その動きがしばらく止っていると、どこかえらいやっかいな所があるのかと心配にもなった。ザイルのねじれるのが一番頭にきた。榎野さんがスリップしたらちゃんと止められるのかなあ、と気にもなった。いよいよ自分の登る番になると、気は楽になる。登るのは、途中困難な所がなくもないが、適度な緊張がかえって岩登りをおもしろくしていると思った。下を見ると高度感はあるけど恐怖感はない。2〜3ピッチも上がると気分が乗ってきた。同じDフェースでは別のルートを山田さん他2名が登っていたが、私達よりまだかなり下にいたので安心した。朝10時に登り始めて頂上に着いたら2時頃だったのには驚いた。知らぬ間に時間がたっていた。同時に、えらく腹のへっているのに気が付いた。おりの時、Dフェースを登ったのだと思うとうれしかった。

8月29日、チンネを登る日はゆううつだった。定着合宿は、あと数日を残すだけだったが、体は疲れがかなりたまっていたし、天気もあまりよくない。少し上の空は雲におおわれている。しかも、三ノ窓雪溪の最上部まで登るのだ。チンネは、その下の雪溪から見ても、ガスの為全体は見えなかった。ガスの中で灰色の濃淡のついた壁が時々一部見えたと、気味の悪いものだった。

今日は、榎野さんと吉田さんと私の3人で登る。1ピッチ目から我々はルートの間違えた。3人で登るのは能率が悪く、楽しみも少ない。ガスで景色なんぞはほとんど見えない。下が見えないと、見える時より高度感が湧いてくる。確保する間寒かった。登っている時、たまにガスが下っていくと自分の位置からも、雲海の向こうに後立山が見えた。ルートはDフェイスの時よりやさしかったが、あまり楽しくなかった。吉田さんの言ったとおり岩登りは2人でやりたいと思った。

〔8-1〕

自 己 流

小 林 俊 人

大学の山岳部に入るにはそれなりの勇氣が必要であった。これは私だけに限ったことであったかもしれない。「勇氣」とは、まがりなりにも山を知り山に登り山を愛してきた今までの経験を一切無の状態に戻し、新しい形態としての登山を一定の法則に従って受け入れる心の準備のことである。特に私の場合には、これまでの山登りが自己流のものであったので、それを捨てることができるかどうか不安であった。

私にとって自己流とは「ハイカー的な登山の仕方」であり、「集団的」であるよりも「単独的」な登山でもあり、「スポーツ」であるよりは「レジャー」の方に近い傾向の登山形式である。そして、何よりも一番重要なポイントは、山は常に憩いの場所であり、決して闘争の場所ではなかった。したがって対象となる山も限られていた。険しい山を眺めることはあっても、その懐に飛込んで悪戦苦闘することはタブーであった。もちろん誰でも（山に登らない人も含めて）一度は経験するであろうところの、ある種の「危険」への憧憬を感じないではなかった。しかし、この憧憬が私をして自己流の世界から集団と規律の世界へ移行させたわけではない。

二十三歳にもなって敢えて新人の仲間入りをしたのは、自分自身の生活態度に煮え切らない甘さを感じたからだ。中途半ばに終わった大学紛争、不節制から生じた患い（急性肝炎）、こういったものが重なってハイカーの根元であるロマンティズムに耐えられない自分ができ上がっていたのに気が付いた。残り少ない学生生活は一分一秒でも無駄にはできない。正直言って、これが山岳部入部の偽らざる動機である。

したがって、私の場合、入部したことが「アルピニストへの道」を歩み出したことではない。又、アルピニストになるつもりは全くない。「アルピニスト」でなければ「クライマー」か？ そうでもない。「ハイカー」的な態度を捨てても捨て切れるものではない。私はただの登山者であればいい。

ここに一つの話がある。彼は昭和十幾年頃北アルプスにも幾度か足を入れ、最近又顧みられているスキー登山もすでに何度か経験していた。彼はあるグループの一員であり、一員としての責任を充分果たしていたであろう。秩父の山々を隈無く歩いた。それも長くは続かなかった。戦争が激しくなり、皆兵隊に行ってしまった。そして、仲間はずつ島南方の小さな島で死んでしま

った。彼だけが残ってしまった。それ以来、彼は一人きりで山を歩いている。ただの登山者として。

クライマーであろうとハイカーであろうと山を愛し想う心は変わらない。だいたい「クライマー」だの「ハイカー」だのと区別すること自体おかしいのではないか。少くとも私がそういった分類の中に組み入れられることがまんできない。老いた彼を見る時、ただの「登山者」の言葉が最も適しているように、私もただの「登山者」でありたい。

山岳部の一員として、短期間であってもいろいろな経験をして、それが今後の私の登山に役に立つであろう。そして、いっしょに行動をした仲間から得たあらゆる意味での知識は、一生忘れることなく私の心の中で生きて行くことであろう。それこそ「登山者」が永遠に「登山者」としてその立場を守っていくことのできる源である。最近のある山岳雑誌が指摘していたように、今や登山は曲り角にあるという。「レジャースポーツ」の拡大は観光開発によるところが多い。その中で、大学の山岳部にしろ、社会人の山岳会にしろ、初期の登山界の伝統と技術を展開してきた。そして今も「スーパーアルピニズム」を持って、曲り角を乗り切ろうとしている。

だが、一つのジャンルを展開する中で、その最も地味な立場を維持する者がいることを忘れてはならない。そして、その地味な立場こそ原点であるのだ。

「山を愛する」ことは難しい。簡単な言葉であっても、その行為は筆では表現できるものではない。複雑で理解し難い。私自身、はっきり理解していない。ただ漠然と、こんなものかな、と思っているにすぎない。あの老登山者に答を聞けるかもしれないが、恐く彼は口を開くまい。

「山を想へば人恋し 人を想えば山恋し」どうしてこれを感傷的だなどと吹き飛ばすことができようか。

流 遭 難 の 登 山 観

船 井 総 一

山登りに遭難はつきものである。この遭難をなくす為の一番の方法は、山をなくすことで、山がなくなれば、山登り自体山登りでなくなるから、山の遭難は絶無となる。しかし、山を削って海に投げ捨てたとしても、海の水があふれて陸地がなくなり、所詮困るのは人間である。しかしどこかの県のように規制条例などで、登山者を締め出すよりも、余程気がきいている。彼らは観光資源たる山はそのままにしておいて、隣にある遭難の温床ともいべき岩山を削り、自県の湾を埋め立て、残りを砕石業者に売り飛ばすべきであった。彼らのやっている事は本質的解決になっていないばかりか、臭いものにはふた式の遭難対策である。

去年の4月に群馬県の谷川岳へ行った。ここにも、遭難防止条例というのがある。ここでは知事名で危険地区の登山を禁止することができるのだそう。そして、我々の一ノ倉沢滝沢リッジの登山計画に対し、入山禁止の返答がきた。しかし、我々は谷川岳へは行った。4月1日であった。嘘ではない。そして向うの全面禁止になるという話であった。我々はたまたま4月1日に入山を決定した。そして一ノ倉には入れなかった。一ノ倉沢の出合を通ると、雪崩も、ブロックも更になかった。堅炭岩という美しいが、物足りない所を登り、一ノ倉沢を上からのぞいて帰ってきた。

遭難は絶対に起る。これは自信を持って言える、と変な所に力を入れなくてもよいのだが、絶対に起るのである。元来、登山行為とは不合理なものであり、宗教登山という御題目のある内は救われていたが、近代アルピニズムとなると、目を被りばかりである。そんなに無理をしなくても良いのにと思うのに、鳥さえとまる所がない所へ行ってみたり、ひどく寒いのに風のビュンビュン吹きまくる高山へ登ってみたりする。こういった半狂いの人達をアルピニストと呼ぶ。実際には、アルピニズムを実践する人達がアルピニストである。そして、その不合理な登山行為の副産物たる遭難を考える時、彼らの実践すべきアルピニズムの歴史をたどり、その本質を探ってみなければならない。

アルピニズムの発生は16世紀であり、ヨジラス・ジムラーの「アルプスの回想録」により、一応確立された。本格的な幕あけは、1786年のモン・ブランの初登頂であり、それに続く初登頂全盛の時期に、ヴェッターホルン、ユングフラウ、マッターホルン等々が登られ、1882年にダン・デュ・ジェアンが登られて初登頂時代は終る。そして、ヨーロッパのアルピニスト達は未踏の山稜、岩壁に目を向けなければならなくなった。アルバート・マンメリーが強烈な個性を持って登場した時、このような時代背景があった。「真の登山家とは一箇の彷徨者である。彷徨者とは、先従者の足跡を正確に辿って、山中をさまよひ歩くことにすべての時間をついやする者を意味するのではない。(中略)かつて人類が到達しなかった場所に達しようとひたすら望み以前にはかつてまだ一度も人間の指頭の触れなかった岩をつかみ、「大地が渾沌から浮び上って」

以来、霧と雪崩にその陰惨な影を捧げている氷の満ちた岩溝に、足場を切って登ることによるこびを感じる者を、私は意味するのだ。換言すると、真の登山家とは、常にあたらしい登攀を試みる人である。」このマンメリズムはバリエーションの方向を与え、北壁の登攀から、ギド・マニョヌ、ワルター・ボナッティに至るアルピニズムの精神を支える存在となった。

この間の登山道具の発達は著しく、おびただしい種類の「かなげ」がそれまで不可能視されていたヨーロッパの岩壁・氷壁の登攀を可能にした。そして、チマ・グランデ北壁登攀のエミリオ・コミチをして「山頂から水滴をまっすぐにたらししてみよう。それこそ自分の辿りたい直線なのだ。」と言わしめ、後にドリュ西壁の登攀によって華々しくデビューしたボルトと相まって「ディレットツィマ」というアルピニズムの一方を暗示する登攀形態を現出させる。そして今や、登山界の先端はアイガーダイレクトからエグエレスト南壁に至っている。今日、マンメリーの精神は場所をヒマラヤにかえて甦ろうとしているのである。

ここに、アルピニズムの歴史を簡単に追ってみたが、追うだけではいけない。追いかけて、つかまえて、お縄にしなくてはならない。つかまりそうになくても、その時のために縄ぐらいは編んでおかねば、面目が立たない。この本が如何程の体裁を誇るかは、まだ出来ていないのでわからないが、本に対する面目ではない。印刷屋に対してでも無論ない。この本を作る為に金を出した人達に対してである。さて、いよいよ、アルピニズムの歴史に考察を加える。モン・ブランからエグエレスト南壁に至る間、おびただしい数の遭難者を見た。アイガー北壁、ナンガ・パルバットでの多数の遭難者、マッターホルンでのウィンパーらの悲劇等々枚挙にいとまがない。これら先人の屍を乗越え、人々を山へ向かわせたのは「そこに山があるから」ではなく、「たまたま山というものがあったから」である。山がなければ、人々は山登りにかわる他の遊びをしていたに違いない。アルピニズムの本質は山の側にあるのではなく、その遊びの対象が山なのである。それ故に、アルピニズムも人間の具体化された属性から発したとみていくべきであり、その結論を決して山に求めてはならない。

ホイジンガは人間の本質をあらゆる人間の行為の中に摸索し、「人間は遊技する存在である」と確信を得た。遊技は人間の根元的な要素の一つであり、真・善・美等と同様、一つの全体性として確立される、即ち独立的・自律的な一般的カテゴリーとして確立されるとした。そして、その遊技の本質は面白さの要素であり、それは遊技者の心をとらえ、離さないものである。この時、我々はこの遊技を日常生活の外にあり、本気でそうしているのではないと感じがちであるけれども、遊技者がそれに没頭する可能性を含んでいる以上、日常生活そのものとなり得るのである。そして、人間が生きて行くのに必要な術と遊技とは永遠な相対関係を続ける。この両行為の精神を、真面目と遊びとしての2つの概念に分かつ際の判断の基準が道徳的良心である。しかしながら、遊技そのものは道徳的規範のカテゴリーには入らない。即ち、それ自体は善悪の判断の対象ではないのである。そして、道徳的意識の中では何の解決も生み出し得ないし、遊技と真面目の問題もついに解き得ないのである。

すなわち、登山について言えば、登山の本質が面白さの要素を内包しており、それ自体に一つ

の全体性が備わっている限りにおいて、登山は遊技であり、論理的思考の判断を超えるのである。登山は人間本質の属性から出た行為の一つであり、あらゆる価値判断を退けるものである。そして、一旦登山行為への決意が為された時、正義と慈悲の認識の上に立つ道徳的意識は不要であり、道徳的意識を敢えて持ち込もうとすれば、それ自体に混乱を招くことになる。更に、遭難を登山行為の一部である点において、遭難はアルピニストの根本的な属性より発現したものであり、一般の価値観の中に位置づけることはできない。マンメリズムの発想法による登山方法を試みて、人々はより高く、より困難を目指す。彼らの行為は人道的ということとはなじまない。遭難も一つの自由な活動としての登山の一要素であり、道徳的価値観に懂着をおこさない。しかし、人間の属性から発現した遊技が、人間を死に招くとは如何にも皮肉な結末である。遭難とはできる限り回避すべき必要なのである。

しかし、回避すべきとは、遭難を恐れることではない。松濤明は次の信念でそのアルピニズムを実践した。「遭難は如何なる場合も起すべきではない。遭難防止のためには万全を尽すべきである。然し遭難を恐れては登山はあり得ない。」遭難は登山における必然でありながら、必然であってはならないという内部矛盾は登山行為に迷いを引き起す。コインを投げれば、表か裏しか出ない様に登山にも成功と失敗しかない。登山は賭けであり、冒険である。賭けには勿論危険が伴う。すべての危険を排除しようとするならば、この冒険に足をふみ入れないことである。即ち山に登らないことである。遭難の不安はすべての登山者に共通する。しかし、不安は人の意識を抑える程の力は持たない。それに対し、恐怖は人の意志を歪める。恐怖した人は危険の排除に狂奔し妥協の登山を行なう。そこには既にアルピニズムは存在しない。「遭難を恐れては登山はあり得ない」のである。そして、「遭難防止に万全を尽す」とはその危険の要素を分析・認識・学習することであり、遭難を恐れることとは本質的差異がある。

良くもない筆者の頭が迷路に入り込んでしまう前に、ここまで述べてきた巨視的登山観における遭難の必然性を整理する。

アルピニズムの歴史における遭難を考えてみる。アイガー北壁が「魔の壁」と恐れられながら、しかも実際に多数の遭難者を出しながら、何故挑まれ続けたか。そこには困難であればこそ、危険——登山行為において困難の本質は危険である。危険を克服しようとする過程に、困難という観念が生まれる——がなければ、遭難者を出さなかった。即ち、危険を肯定することによって、アルピニズムの弁証法的展開があった。アルピニズムが危険を否定するものであれば、人々は安全確実な山登りを楽しみ、アルピニズムの発展はなかったに違いない。ここで筆者の文才を顧る時、河東碧梧桐の文を引用するのやむなきに至った。「で、登山の興味は、やれ気宇を豁大するとか、塵気を一掃するとか、いろいろ理屈をならべるもの、その実、だれもがこわがって果たしえない冒険を遂行する好奇心が主題であった。」

そして同時に、危険を肯定させた人間本来の要素が冒険心であることを見逃してはならない。冒険心は、どんな人間にも多かれ少かれ、存在するものであり、その対象となる行為の価値や是非の問題は別として、未知のものを見たい、知りたい、経験したいという欲求は抑え切れるもの

ではない。個々の日常生活と抗争しつつ、生活の日常性を打破した行為が冒険と言われるものである。そして未知への希求が人類の歴史にどのような功績を残したかを考える時、冒険の持つ意味も自ずからはっきりとする。過度の引用は、安物の卒論に似て内容の低下をひき起すのを知りつつもまた引用する。「日本では、冒険は『無謀』でないときだけ支持されている。だが『無謀でない冒険』とは形容矛盾であって、冒険は本来『無謀』なものである。100パーセント安全な冒険は、冒険とはいわない。大なり小なりの失敗の可能性があって、なお実行してみることに、トライアル・アンド・エラーの原則に立つこと、賭けの要素がはいることが冒険である。日本では実行にあたって、ただの1パーセントも失敗の可能性があってはならないのだ。失敗しないための最も確実な方法は、何もしないことである。すこしでも冒険的だったら中止すること。これが、現在のところ独創的仕事の乏しい日本の社会での根本理念となっている。」(本多勝一「冒険と日本人」)

遭難は、登山というものが存在する限り、決してなくならない。遭難がなくなった時、それはアルピニズムの終焉を意味する。しかし、それでは警察は警察そのものの存在価値をなくすために、日夜努力している式の思考方法で、問題の解決にはなり得ない。

ここに、明治大学山岳部遭難対策委員会の調査報告がある。氷雪上のスリッパにおける反省として、一番多いのは「ちょっとした不注意が災いした」で48.1%、以下「能力が至らなかった」19.8%、「不可抗力とも不注意とも断言できない」17.9%「その他または不明」12.3%、「不可抗力である」1.9%と続く。この数字は反省者の主観を通した結果であるから、見様によっては「ちょっとした不注意」も「能力が至らなかった」結果であるかも知れない。木から落ちた猿と豚に「お前は不注意で落ちたのか、それとも能力が至らなかったのか。」と聞けば、猿は「不注意だ。」と答えるであろうし、豚は「能力が至らなかったからだ。」と答えるであろう。それらに対して、「本当はどうなんだ。」と聞いている様なものだからである。

問題とすべきは、約半数の遭難者の意識の内に「ちょっとした不注意」で事故をひき起したという反省があることである。統計確率的に言えば、人間なんでものは誰かがいつかミスをするものである。だから、一切のミスのない登山は神様の登山で、我々人間様の山登りではないとも言える。しかし、そうだからといってすべての人がそれを容認しているかと言えば、ほとんどの人がそうではない。個々の内には程度の差こそあれ、遭難を起してはならないと言う潜在的意識がある。それは個々の登山者の遭難に対する意識であり、ひいては登山全般に対する意識である。即ち、日頃からそういったことを真剣に考え、それに対するそなえを欠かない人達と、なんとなく山登りをしている人達との違いである。なるほど、落ちれば痛いし、落ちることは怖い。しかし、それと遭難に対する意識とは別物である。遭難は客観的意識に立脚すべきであるのに対し、落ちるのが怖いのは、あくまでも人間の内面的感情であって主体的意識を表現したものに他ならない。そして、このことは登山全体についてもあてはまり、こういった相反する方向のもの——ロゴスとパトス——から弁証法的に構成されるものが、登山の意識となるのである。登山意識の

中には、主体性、情熱、冒険心等々が渦を巻いており、それらの影響下に登山の技術的行為があるのである。遭難は個々の意識でとらえられると同時に、技術的解決が為されなければならない。

しかし、大学山岳部においては、4年間という時間的制約と、一個の大学という小さな基盤を考えると、意識も技術もクソもなくなる。大学山岳部が、4年間ということと、(大学)山岳部ということに固執するならば、それはもう遭難のことなど私が書いている場合ではない。遭難の問題以前に、大学山岳部自体が遭難してしまう。そして、大学山岳部の存在価値を問う時、その内部矛盾の故に疑問を持たざるを得ないのは私だけではないはずである。即ち、大学山岳部においては、主体的な山登りが出来ないところに問題がある。登山が極めて個人的なスポーツであるとするならば、主体性を否定された大学山岳部の登山は意味を持たない。少くとも妥協の産物である。納得のゆかない登山で遭難したら、死んでも死に切れない。そして、3年目・4年目という一番登りたいし、登れる時期に新人の育成とは実に涙ぐましい。しかも、その新人が主体性、情熱、冒険心を備えておればよいが、山岳部に入ることで自分が冒険であるような時は、なんとも情ない。外大は全学1600人であり、その60%の960人が男子学生であり、10%が情熱家であるなら96人残る。そしてこの半分の48人が激しい運動に耐えられる体力の持主で、そのまた半分の24人がスポーツを指向し、その半分の12人が実際に体育会系のクラブに入るとする。この12人を18ある運動クラブで分割するのである。こう考えてくると、外大の山岳部は限界線上にあると言わざるを得ない。今後、精鋭主義を取ることは難しく、現状のままグズグズと中間に行くべきか、同好会的にやって行くべきか、底辺養成に徹すべきか、インターカレッジにその活路を見い出すべきか、それとも廃部すべきか考えなければならない問題である。どの道を選ぶべきかは別の機会に譲るとしても、どれを選んでも、常に自分の能力を越えたことを試みる人間が出現するであろうことを忘れてはならない。そしてまた遭難が起るのである。

遭難の対応策とは言えば、現役の論理からすれば、先に述べた様に、技術と意識の向上にすべてがある。そして、責任は山に登る人間にあり、個人に帰されなければならない。責任問題において、感情と金銭の話は不要であり、死ぬのは本人だと言うところから出発しなければならない。親にも、リーダーにも責任はない。勿論OBにあらうはずはない。一般にはリーダーの責任が問われがちであるけれど、リーダーは彼らの保護者でもなければ、絶対命令者でもない。基本的には全員が同列の位置にあり、連れて行くのでも連れて行ってもらうのでもない。もし、リーダーに判断が委ねられるならば、それは主体的意識と信頼の上に立ってされなければならない、責任が移行することにはならない。登るのも本人であり、責任も本人自身にあるのである。この点でいい加減な登山者が余りにも多いのではないか。もっと真剣に考えるべきである。

現実問題として、金は要る。ならば、保険に入ればよい。そのために山岳保険というのがある。それで不足なら満期をひきのばしてかけ金を少なくして、沢山はいればよい。そして緊急時の連絡システムを作る。この辺までが義務である。OBとの間に、非常時の精神的・肉体的・経済的バックアップの理解があるのなら、OBへの計画書・報告書の提出も、これまた義務以上の何物でもない。我々は考え、義務を遂行し、その後山に登るのであって結果はすべて個人的なものとなる。

そして一旦登山行為に移れば、考えることは何もなく、自分の登山に没入してしまうのである。我々は困難と高さを求め、未知と冒険を欲して山に行くのである。「いわんや山に登るいよいよ高ければ、いよいよ困難に、ますます登れば、ますます危険に、いよいよますます万象の変幻に逢遭して、いよいよますます快樂の度を加倍する。これを要するに、山は自然界の最も興味あるもの、最も豪健なるもの、最も高潔なるもの、最も神聖なるもの、登山の気風興作せざるべからず、大に興作せざるべからず。」（志賀重昂「日本風景論」）